「欧米文化研究」第18号　2011年

パリ出版書籍商トレペレル家とそのタイトルページ
――インキュナブラからポスト・インキュナブラへ――

平　手　友　彦

1470年、ギヨーム・フィシェ Guillaume Fichet とヨハン・ハインリン Jean Heynlin がフランスで最初の印刷工房をパリのソルボンヌに三人の職人とともに開き、活版印刷という新たな手法で知を伝達し始めたことはよく知られている[1)]。以降1500年までに印行された印刷本をそれまでの写本と区別して「インキュナブラ」（揺籃本）incunabula と呼ぶが、後世の印刷本との境とされる「1500年」はもっぱら形式的なもので、実質的な区切れは1520年ないし1530年にある[2)]。1500年までの印刷本をインキュナブラとするなら、1501年以降1530年までのそれはいわば「ポスト・インキュナブラ」post-incunabula となり、書物の歴史ではこの1470年から1530年の60年間を印刷本の「揺籃期」と考える。ヨーロッパ全体のインキュナブラはおよそ27000点で、フランス（言うまでもないが当時の「フランス」国境は現在のフランス共和国のそれのように明確ではない）はこのうち約4000点を出版し、その8割はパリとリヨンに集中した[3)]。

しかし、新たな知識の伝達手法は必ずしも直ちに新たな読者の獲得をもたらしたわけではない。なぜなら揺籃期のテクストの多くはラテン語であったからである。1601年までに出版された51753点のフランス語印刷本のカタログ（*French Vernacular Books*）を編纂したワーズビー M. Walsby によると、1470年から1530年に出版されたフランス語テクストは全体の12% に過ぎない[4)]。また、大英図書館の ISTC (Incunabula Short-Title Catalogue) を利用したニエート Ph. Nieto の調査によれば、パリはラテン語インキュナブラ2075点に対してフランス語が796点と比較的多いものの、ヨーロッパの他の出版主要都市では、イタリア語テクストが78.5% と圧倒的に多いフィレンツェを除けば、その多くはラテン語が占める[5)]。なるほどソルボンヌの先駆者が最初に世に問うた書物もラテン語（G. バルツィツァ G. Barzzizza『書簡集』*Epistolae*）であった。

言語で新たな読者を直ちに獲得できなかったインキュナブラは、木版挿絵という「イマージュ」image の活用によってその弱点を補う[6)]。既に写本において一定の地位を得ていたイマージュは、カルタなどの版画を経て木版画という同一イマージュの「大量生産」を獲得するに至る。木版挿絵入りの版本は、遅くとも1478年までにドイツからリヨンに到達し、その数年後にはパリの多くの印刷工房で不可欠なものとなった[7)]。やがて時代が下るとイマージュは言葉の壁を越える勢いを持つことになる（パリのサン・ミッシェルの書店では日本語版 MANGA が日本発売後数週間も経たないうちに平積みされている）。

出版書籍商にとって売り上げは重要である。活版印刷は学術的ユマニスト的に始まったものの、書物は「何よりもまず、ひとが生計をたてるために作り出したひとつの商品」として出現したからである[8)]。印刷職人はそのために工房を手に入れ、印刷機を購入あるいは借り上げ、活字や木版を始めとする道具を製作し、必要とされるだけの高価な紙を手に入れながら、毎日長時間の厳しい労働に励んで、血縁やネットワークで築いた共同事業を継続していかねばならない[9)]。「商品」を直接訴えるイマージュは大いに活用すべき有益な道具となり、このイマージュが集中的に現れるのがタイトルページである。

木版挿絵というイマージュに目を付けたのが、時禱書などを扱う写本書籍商のアントワーヌ・ヴェラール Anthoine Vérard であった。王侯貴族が好むテクストに木版挿絵を入れて印刷させ、それに彩色細密画と自らが「制作者」である証しの献辞を加えて豪華本に仕上げた[10)]。ヴェラールが「王の書籍商」になったとすれば、ティエルマン・ケルヴェール Thielman Kerver やシモン・ヴォストル Simon Vostre は挿絵入り時禱書を専門とし、ミッシェル・ル・ノワール Michel Le Noir は騎士道物語を得意とした。また、ジョス・バード Josse Bade やジャン・プティ Jean Petit のようなユマニスト印刷業者や書籍商もいれば、危ない印刷物を出して監獄送りになるような印刷工もいた[11)]。このように15世紀末パリの印刷出版の営みは徐々に専門化されていく[12)]。その中で特に民衆本を扱ったと言われるのがジャン・トレペレル Jean Trepperel とそのファミリーである。

このトレペレル家に冠せられた「民衆」populaire も活版印刷の揺籃期においては一筋縄では行かない。シャルチエ R. Chartier も言うように、この時代に「民衆」populaire に特化された読者共同体を規定することはできないからである[13)]。しかし、読者は規定できないにしても、トレペレル家による印刷本とヴェラールなどの大書籍商による豪華本を実際に比較すればその違いは明らかである。第一はテクストのジャンルで、トレペレル家は、暦、信心書、聖人・聖女伝、王令、騎士道物語、神秘劇、教訓劇や阿呆劇[14)]、滑稽説教、歌集など日常生活に関わるテクストをゴチック活字を使ってその多くをフランス語で出版し、第二に、それらテクストは他の出版書籍商の「二番煎じ」であることが少なくなかった[15)]。第三に、飾り文字やタイトルの欠落[16)]、テクストにも間違いがあって完成度が必ずしも高くなく[17)]、第四に、様々の木版挿絵をタイトルページなどに用いて、これをよく使い回すことである（後述）。要するに内容からも体裁からも上等なものとは言えない。しかしながら、このトレペレル家に代表される「民衆派」の営みによって、中世末に口承で伝えられた韻文作品の多くが印刷されたテクストとして今に伝わっているのである[18)]。

「民衆」的色彩に加えて、出版年や出版元の特定が困難な版本が多いことから、これまでトレペレル家の出版活動について本格的な研究がなされてこなかった[19)]。本論においては、ジャ

ン・トレペレルからその妻マルグリット Marguerite、彼女と娘婿のジャン・ジャノ Jean Jehannot との共同作業、つまり1490年代初頭から1520年前後のおよそ30年間のトレペレル家の出版活動と、彼らの印刷本のタイトルページに注目して、パリの活版印刷揺籃期、即ちインキュナブラからポスト・インキュナブラへの変化を考察する[20]。

*

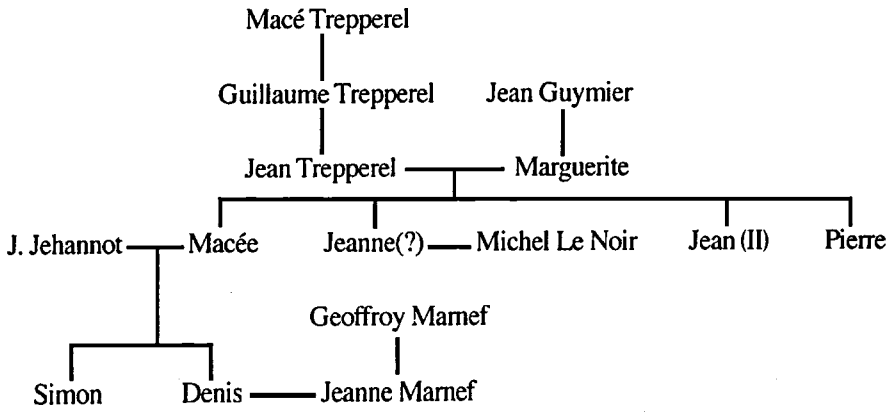

図1　トレペレル家

ジャン・トレペレルの生年は分からず、1511年もしくは1512年に死亡したと考えられる（以下図1参照）。父ギヨーム Guillaume はノートル・ダム橋 Pont Notre-Dame で仕事をして、祖父マセ Macé の仕事場もその数件隣にあった。ジャンはマルグリットと結婚する1457-8年頃から祖父が亡くなるまでこの祖父のところにいたようである[21]。二人には二人の息子ジャン Jean (II) とピエール Pierre と娘がひとりあり、この娘には祖父と同じ名前マセ Macée が付けられた。彼女は後にジャン・ジャノと結婚する。J. トレペレルが亡くなって未亡人となったマルグリットはひとりで、あるいはこの娘婿 J. ジャノと共同で印刷業を続ける。ジャノの死後、今度は未亡人マセが息子ドニ・ジャノ Denis Janot と共同で家業を引き継ぎ、マセが亡くなるとドニはジャンヌ・マルネフ Jeanne Marnef と結婚して印刷出版業を続けていく。二人の息子ジャンとピエールについてはよく分かっていないが（ジャンについては後述）、トレペレルの家業が未亡人マルグリットと娘婿のジャノの方に相続されたことから、彼らの存在は必ずしも大きくなかったと推測できる。また、J. トレペレルにはその姉妹または娘と思われるジャンヌ Jeanne がおり、彼女は後にパリ大学宣誓書籍商 M. ル・ノワールと結婚する。他の出版ファ

ミリーと同じく、トレペレル家も血縁関係で結びついて出版活動を維持していくが[22]、この事業維持には女性、つまり未亡人となる妻（ジャンの妻マルグリット、ジャノの妻マセ）の役割が大きい[23]。

現存するJ.トレペレルの最初の印刷本は1492年（旧暦1491年）2月20日の『イェルサレムの破壊とピラートの死』*La Destruction de Jherusalem et la mort de Pilate* で、その「コロフォン」（奥付）colophon からノートル・ダム橋で印刷されたことが分かる（«sur le pont nostre dame a lymaige sainct laurens»）（以下図2参照）。彼はこの橋を拠点にして順調に出版事業を続けるが（このアドレスで日付の入っているものは20点で、J.トレペレルは肩書きに「書籍商」«libraire et marchant»、「書店」«libraire»、「印刷商」«marchant et imprimeur» を用いる）、1499年にインキュナブラ時代の区切りを印象づける出来事が起こる。即ちパリの出版書籍商が集まるこのノートル・ダム橋の崩落である。1413年建造のこの木造の橋は両側に家々が並び、その家屋にローマ数字が打たれ（祖父マセの仕事場は上流側10番にあった）、中央の通りを歩めば、そこは橋上とは思えないほどの見事な出来映えであった。既に崩落の危機にあった1440年2月13日時点でパリ高等法院は改善命令を出していたが、パリ市はこれを実行せず、遂に1499年10月25日午前9時に橋上の家々ともどもセーヌ川に崩落してしまう[24]。事前に警告が発せられたのであろう、住民は予め荷物を持って避難し、人的被害は最小限に食い止められたようである。しかし、住居と仕事場を失った人々は黙ってはいない。彼らは直ちに提訴し、翌1月9日にはパリ市当局が崩落の責任を負うべきとする判断が高等法院から示された。原告側の殆どはJ.トレペレルやA.ヴェラールを始めとする出版書籍商であった[25]。崩落の警告を受けたJ.トレペレルは右岸市庁舎前のタヌリ通り（«en la rue de la tainerie en lenseigne du cheval noir»）に数ヶ月避難し（このアドレスで現存するのは1499年J.ルグランJ. Legrand の『良俗の書』*Le livre de bonnes moeurs* の1点のみ）、続いて印刷書籍業で賑わうサン・ジャック通り（«en la rue saint iacques (aupres sainct Yves) a lenseigne saint Lourens»）に移動して1503年までここに留まる（1500年9月19日出版のO.ド・ラ・マルシュO. de la Marche の『決断の騎士』*Le Chevalier Delibere*（図4参照）が橋崩落後の最初で、このサン・ジャック通りのアドレスで日付の入っているものは3点、肩書きには「パリ大学書店」«libraire en luniversite de paris» を用いることがある）。

ノートル・ダム橋崩壊の混乱で不安定な状況にあったにも関わらず、J.トレペレルは出版事業を続ける。印刷機や活字、印刷済み紙葉、そして紙などの材料はどうしたのだろうか[26]。ランボーS. Rambaud は、J.トレペレルが妻マルグリットの父親であるジャン・ギミエJean Guymier（1486年没）の工房（«ecu de France de la rue neuve-notre-dame»）で既に1492年の時点から印刷を始め（J.トレペレルは1504年からここをアドレスにする）、ノートル・ダム

橋は販売店舗だったと推測している[27]。工房をノートル・ダム橋から右岸のタヌリ通りに一旦移動させ、今度はセーヌを渡ってサン・ジャック通りで再開することは、荷物の移動を考えれば（加えてそこからヌゥーヴ・ノートル・ダム通りへの再移動もある）、その手間は確かに相当なものであるからランボーの推測も魅力的ではあるが、本当のところはよく分からない。

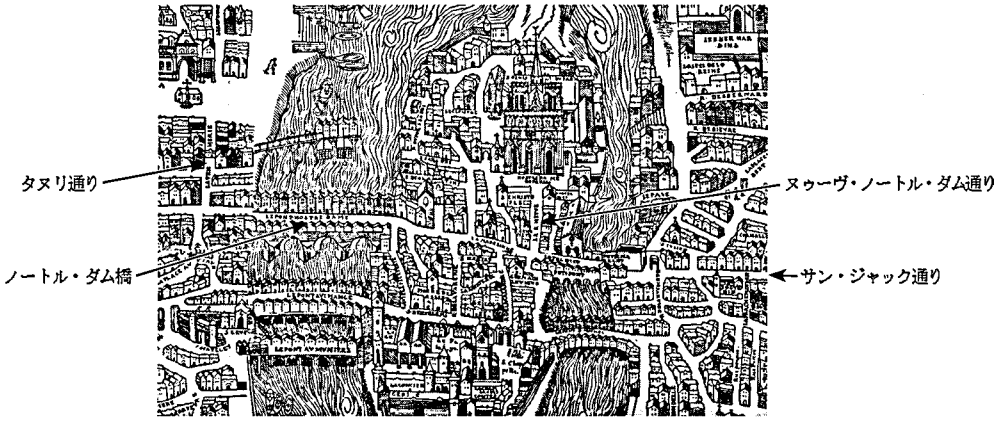

図2　アンリII世治下のパリ（シテ島付近）[28]

ノートル・ダム橋は1500年3月28日に復旧工事が始まり、ようやく1512年9月に石造りで再建される。架橋工事に時間が要したからか、先にも触れたとおりJ.トレペレルはここには戻ってこない。義父J.ギミエから相続したヌゥーヴ・ノートル・ダム通りで1504年5月31日には出版を続けていた（このアドレスで日付の入ったものは5点で、肩書きには「印刷書店」«imprimeur et libraire»、「書店」«libraire» を用いた）。印行年の入ったJ.トレペレル最後の版本は1511年6月12日のR.ルフェーブルR. Lefèvreの『ヘラクレス武勇伝』*Les proesses et vaillances du preux Hercules*（図5参照）である。コロフォンに「故ジャン・トレペレル未亡人」«veuve feu Jean Trepperel» と入ったものが1512年9月17日の『貧者の宝』*le Tresor des povres qui parle des maladies* であることから（この版本の印刷者にはJ.ジャノの名も併記されている）、未亡人が仕事を継いだのは1511年夏から翌年の夏にかけてと考えられる。

J.トレペレル未亡人はそのままヌゥーヴ・ノートル・ダム通りで事業を継続し、時折パートナーを娘婿J.ジャノに求めた共同作業は1517年頃まで続いたらしい[29]（このアドレスで日付の入ったものは2点で、何れもJ.ジャノの肩書きには「パリ大学宣誓書籍商」« (imprimeur et) libraire iure en luniversite de paris» が入っており、他の出版年不詳の版本でもこの肩書きが使われることが多い）。ジャノは既に1498年から活動を始めていたようで、1522年1月4日にはパリ大学四大宣誓書籍商の一人となるやり手であるが（1515年1月30日には大学宣誓書籍商）、現存する殆どの彼の版本には日付が入っていない[30]。未亡人との共同作業から独立した後はす

ぐ近くで出版業をひとり営んだ（«A lenseigne Sainct Jehan Baptiste en la rue Neufve Nostre Dame pres Saincte Geneviefve des Ardans»）。1521年（8月14日以降）にジャノが亡くなると未亡人マセが1522年に後を継いで同じアドレスで、その後マルシュ・パリュ通り（«Rue de Marchepalu a l'enseigne de la Corne de Cerf»）に移動して1531年まで息子 D. ジャノと商売を続ける[31]。

*

トレペレル家が出版した活字本は、活字と木版挿絵から特定したランボーによれば1492-1511年の J. トレペレルでおよそ240点、1511-1521年の未亡人マルグリット単独あるいは J. ジャノとの共同で175点に上る[32]。その多くに出版年が入っていないこれらインキュナブラとポスト・インキュナブラのクロノロジーを作成することは容易ではない。本論においては、コロフォンやタイトルページに «Trepperel» あるいは «I(J)・T» のプリンターズ・マークが印刷され、出版年（月日）が入っている48点の版本のタイトルページを分析した。

ところで、インキュナブラのタイトルページは一般的にどのようなものだったのだろうか。スミス M. M. Smith によればインキュナブラのタイトルページは以下のように変化した[33]。

1　最初期は写本の形式を真似てタイトルページはなく、「インキピット」（前付け）Incipit に続いて直ぐに本文が始まる。
2　冒頭に「ブランク」blank（ブランクページあるいはブランクリーフ）が置かれ、販売までの「保護」protection の役割を果たす。
3　ブランクに「簡素なラベル」modest label が制作者の「同定」identification のために付けられる。この目印は1470年代の終わりから現れ始め、ブランクの使用が減少して簡素なラベルが増加するのが1480～1485年、その後このラベル使用が急増して世紀末には圧倒的となる。
4　付けられたラベルに様々な情報が組み込まれ、装飾が施されて「宣伝」advertising に寄与する。木版画やプリンターズマークがタイトルページに現れるのが1480年代中頃である。

要するにインキュナブラにおけるタイトルページは、「保護」、「同定」、「宣伝」の必要から生まれ発展した[34]。この発展は、特定の個人のために作成された写本とは異なり、不特定多数の購買者を想定した活字印刷であったからこそ生まれたものであり、そしてこの想定が、同じテクストを印刷する際、他の印刷業者との弁別機能となるプリンターズマークの必要性をも生

表　トレペレル家による印刷本

	印行年	著書とタイトル			印行年	著書とタイトル	
1	1492.2.20	*La Destruction de Jherusalem et la mort de Pilate*	不	25	1499.3.6	*La vie Robert le Diable*	B
2	1492.5.15	*Pierre de Provence et la belle Maguelonne*	A	26	1499.3.18	M. d'Auvergne: *Devotes louanges a la Vierge Marie*	A
3	1492.5.20	N. Perottus: *Rudimenta grammatices*	A	27	1499.5.2	*Catholicon abbreviatum*	A
4	1492.6.20	*Style des requestes du Palais*	A	28	1499.5.9	*L'Art et science de rethorique*	A
5	1492.8.23	G. de Roye: *Le dotrinal de sapience*	A	29	1499.10.18	*La vie madame saincte barbe*	A
6	1492.12.19	J. Gerson: *Traite des dix commandements de la Loi*	A	30	1499	J. Le Grant: *Le livre de Bonnes meurs*	A
7	1493	H. Baude: *Le debat de la dame et de lescuyer*	無	31	1500.5.30	L. de Saxonia: *Vita Christi*	不
8	1493.5.15	*Pierre de Provence et la belle Maguelonne*	A	32	1500.7.23	*La Danse Macabre*	B
9	1493.8.3	G. Alexis: *Le martyrologe des fausses langues*	A	33	1500.9.19	*O. de la Marche: Le chevalier delibere*	B
10	1493.12.22	*La vie madame saincte barbe*	A	34	1501.2.28	Anianus: *Compotus cum commento*	A
11	1494.2.4	*Croniques de france abregees*	A	35	1502.3.25	*La nef des folles*	不
12	1494.8.28	Anianus: *Compotus cum commento*	無	36	1503	J. Le Grant: *Le livre de Bonnes meurs*	不
13	1495.3.26	*Croniques de france abregees*	A	37	1504.5.31	P. Camus: *Olivier de Castille et Artus d'Algarbe*	B
14	1495.6.2	Vergilius: *Liber georgicorum virgilij*	A	38	1506.3.6	O. de Saint-Gelais: *Les xxi. epistres dovide*	B
15	1495.7.18	Ovidius: *De remedio amoris cum commento*	A	39	1506.5.8	G. Tardif: *L'art de faulconnerie*	B
16	1495.7.21	J. Gerson: *Traite des dix commandements de la Loi*	A	40	1506.6.10	G. d'Esclavonie: *Le chasteau de virginite*	B
17	1497.2.20	L. Valla: *Elegantias latinae linguae*	不	41	1510.6.17	*Le Vengeance et destruction de Iherusalem*	不
18	1497.5.31	*A lonneur de nostre seigneur ihesucrist*	A	42	1510.8.17	*Livre des merveilles du monde*	不
19	1497.7.8	F. Villon: *Le grant testament*	A	43	1511.6.12	R. Lefèvre: *Les proesses et vaillances du Hercules*	C
20	1497.8.31	*La Vie du terrible Robert le diable*	不	44	1512.9.17	A. de Villeneuve, G. de Solo: *Le tresor des povres*	C
21	1497.10.18	N. Perottus: *Rudimenta grammatices*	不	45	1517.8.17	A. de Villeneuve, G. de Solo: *Le tresor des povres*	C
22	1498.11.15	*Croniques de france abregees*	A	46	1519	J. Le Grant: *Le livre de Bonnes meurs*	不
23	1498.11.15	L. Montaltus: *Tractatus reprobationis sententie pilati*	A	47	1527.9.10	*La tres plaisante hystoyre de Maugist Daigremont*	C
24	1499	J. Meschinot: *Les Lunettes des princes*	A	48	1531.6.17	*La Vengeance de Notre-Seigneur*	不

んだと考えられる。

さて、トレペレル家の印刷本のタイトルページはどのようになっていたのだろうか(表参照)[35]。最初期のタイトルページは、「A　タイトル＋プリンターズ・マーク」のパターンである（図3)。タイトルを一行あるいは数行で、時に活字ポイントを変えてページ上部に置き、その下にプリンターズ・マークを入れる。これがほぼノートル・ダム橋崩落の時期まで踏襲され、続いてタイトルの下に木版挿絵（テクストに対応しない場合もある）を入れて、P・マークをコロフォンの前後に移動させる「B　タイトル＋挿絵（プリンターズ・マークはコロフォン前後)」となる（図4)。そして最後は、出版（販売）元などの情報をタイトルページに入れて、P・マー

クはコロフォンの後ろに置くか、消滅させる「C　タイトル＋挿絵＋出版元情報（プリンターズ・マークはコロフォン後か消滅）」（図5）の形式を取る。おおよそこのようにタイトルページの変化は現れる[36]。また、4年半の間に二度再版される『簡略フランス年代記』（11、13、22）は、何れもタイトル下とコロフォンの後にP・マークが印刷されており、この一貫性から印刷形式に対する作品の拘束力の強さを読み取ることもできる。

図3　8『ピエール・ド・プロヴァンスと麗しのマグローヌ』
(BnF. Res-Y²-1083)

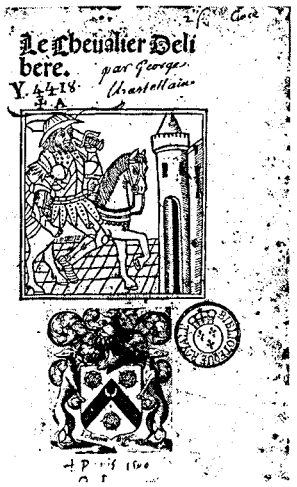

図4　33『決断の騎士』
(BnF. Res-Ye-249)

図5　43『ヘラクレス武勇伝』
(BnF. Res-Y²-690)

以上の分析からトレペレル家のタイトルページはスミスの第3段階の「同定」から始まると言って良いだろう。スミスによれば、ドイツやイタリアと違って、フランスでは木版画の代わりにP・マークをタイトルページに入れたものが多いが、このことはトレペレル家のタイトルページにも当てはまる[37]。しかし、P・マークの移動については、当初コロフォンの前後に位置していたものがタイトルページに移動した「後ろから前への移動」とスミスは説明しており[38]、P・マークをタイトルページに入れて出発し、その後これをコロフォンに移動させるJ.トレペレルの「前から後ろへの移動」とは異なる。

変化を具体的に見ていこう。『ピエール・ド・プロヴァンスと麗しのマグローヌ』(図3)はP・マークと書名の一部の「麗しのマグローヌ」«la belle maguelonne» の文字で印刷元とテクストの二つの情報を簡潔に示しているが、このタイトルはいわば「目印」に過ぎない（次ページのインキピットでは「プロヴァンス伯の勇敢なる息子ピエール殿とナポリ王の娘である麗しのマグローヌの物語」«hystoire du vaillant chevalier pierre fils du conte de provence et de la belle maguelonne fille du roy de naples» (fol. Aii, ro) と「正式タイトル」が現れる）[39]。この半年後

に出版された『聖バルブ伝』（図6）では、同じ形式のタイトルページでありながらも既にP・マークには三色の彩色が施されて視覚的効果として機能し[40]、スミスの言う「同定」の枠を超えて「宣伝」に向かっていると考えることもできる。しかし、この「同定」から「宣伝」への移行は複雑な問題を孕む。なぜなら、当時の購入者が現代の平積みされた書物のように直接タイトルページを見て本を選んだとは考えにくく、「同定」はもっぱら印刷者や書籍商のために機能していたと考えるのが自然だからである[41]。この移行は、インキュナブラの時代に購入者が書籍商とのやり取りの中でどのように書物と接触して購入したか（つまり書店側から言えば販売方法）が分からなければはっきりしない。

図6　10『聖バルブ伝』
(BnF. Res-H-967)

『決断の騎士』（図4）はこの「同定」から「宣伝」の途上に位置する。P・マークはコロフォンの後ろに移動し、その代わりの木版画はテクスト内容に即して選ばれ、タイトルもP・マークに対して単なる「同定」に過ぎなかった『ピエール・ド・プロヴァンス』や『聖バルブ伝』とは異なり、テクスト内容を示す木版画と調和している。この段階で書物は出版書籍商内部での「同定」から外れ、タイトルと木版画がテクストに照応し、外部に向けた「商品」として体裁を整えたことになる。続く『ヘラクレス武勇伝』（図5）では、その視覚的効果（木版図柄から朱色による二色刷まで）のみならず、内容（「目次にあるように三十七の章を含んでいる」«Contenant en soy xxxvii chapitres comme il appert par la Table»）と出版情報（「パリはヌゥーヴ・ノートル・ダム通りフランス・エキュの看板で印刷」«Imprime a Paris En la Rue neufve Nostre dame a Lenseigne de lescu de France»）が追加され、「宣伝」のタイトルページとして完成する。また、タイトルページを音読を前提としたテクストという点で見ると、文字情報量が増加することで、外部に対する（要するに販売のための）音読テクストとしての機能も充実している。この『ヘラクレス武勇伝』の雄弁なタイトルページと『ピエール・ド・プロヴァンス』の寡黙なそれを比較すれば違いは歴然としている。

以上、トレペレル家におけるインキュナブラからポスト・インキュナブラへの過程は、タイトルページに注目することで、印刷工房や書店内部での目印から外部への商品として発展の過程であったことが分かった。また、当時の読書のあり方がそうであったように、タイトルページも音読テクストの対象という視点に立てば、文字情報が充実するトレペレル家のポスト・インキュナブラはそのタイトルページからも「見る読書」だけではなく、「聞く読書」のための商品としても機能し始めたと考えられるのではないだろうか。印刷工房あるいは書店の中で静

かな弁別機能によって準備されていた版本は、テクスト内容を訴える視覚的効果と同時に饒舌な呼び売りをも可能にする声のテクストをタイトルページに載せてパリの街で売りさばかれた[42]。

注

1) その経緯については、例えばH.-J. Martin, «Imprimerie et humanisme à Paris : les presses dites de la Sorbonne», dans *La Naissance du livre moderne (XIVe-XVIIe siècles)*, Editions du Cercle de la Librairie, 2000, pp.116-131.
2) A. Labarre, «Les incunables : la présentation du livre», in *Histoire de l'édition française*, sous la direction de H.-J. Martin et R. Chartier, t.1, Promodis, 1988, p.195.
3) J.-M. Dureau, «Les premiers ateliers français», in *ibid.*, p.175.
4) A. Pettegree, M. Walsby, A. Wilkinson, *French Vernacular Books (FB)*, 2 vols, Brill, 2007; M. Walsby, «Les premiers temps de l'imprimé vernaculaire français», in *Le Berceau du livre imprimé autour des incunables*, éd. P. Aquilon et Th. Claerr, Brepols, 2010, p.51.
5) Ph. Nieto, «Géographie des impressions européennes du XVe siècle», in *Revue française d'histoire du livre*, N.118-121, Droz, 2003, p.138, p.160.
6) BnF所蔵の約2000点のincunabulaのうちその三分の一に当たる670点に挿絵がある（L. Firoben & N. Petit, «Icono 15, base iconographique des incunables illustrés français de la Bibliothèque nationale de France», in *Le Berceau du livre imprimé autour des incunables*, p.297）。
7) J. -M. Chatelain et L. Pinon, «Genres et fonctions de l'illustration au XVIe siècle», in *La Naissance du livre moderne*, p.236, p.268.
8) L. Febvre et H.-J. Martin, *L'apparition du livre*, A. Michel, 1971, p.165.
9) 詳しくは時代はやや下るがA. Parent, *Les métiers du livre à Paris au XVIe siècle (1535-1560)*, Droz, 1974, pp.89-96, pp.126-143を参照。
10) Anthoine Vérardについては、M. B. Winn, *Anthoine Vérard, Parisian Publisher, 1485-1512, Prologues, Poems and Presentations*, Droz, 1997及び、拙論「仏訳『デカメロン』研究II　ーアントワーヌ・ヴェラール、印刷書籍商又は戦略家ー」、『広島大学総合科学部紀要　V』、1999、pp.107-132を参照。
11) 拙論「フランソワ1世治下のパリのブルジョワによる日記（後）　—「パヴィアの敗戦」からのニュースあるいは「噂」—」、『欧米文化研究』第17号、2010、p.45を参照。
12) J. -M. Dureau, *op. cit.*, p.169.
13) R. Chartier, «Stratégies éditoriales et lectures populaires, 1530-1660», in *Histoire de l'édition française*, p.589.
14) 「トレペレル集」Recueil Trepperelと呼ばれる劇集が知られている。35点の劇が収められ、そのうちの1点を除き残り34点はTrepperel工房から1504年～1525年に出版されたらしい（*Le Recueil Trepperel, fac-similé des trente-cinq pièces de l'original*, par E. Droz, Slatkine Reprints, 1967）。印刷本ではこの他にRecueil de Florence CohenとRecueil du British Museum Londresがある。

後者には64作品が収められ、そのうち20点ほどがJ. Trepperelと関連を持つNicolas Chrestienから出版されている（*Le Recueil du British Museum*, par H. Lewicka, Slatkine Reprints, 1970, pp.XII-XVII）。前者は1540～1550年に印刷された53点から成り、1949年にG. Cohenが転写して刊行されたが（*Recueil de farces françaises inédites du XVe siècle*, par G. Cohen, The Medieval Academy of America Cambridge, 1949）、不正確で評判がよくない。いずれも本論では対象としない。

15) この意味では後の青表紙本のNicolas Oudotの先駆者とも言える（R. Chartier, *op. cit.*, p.601）。また、J. Trepperelは«Aux caremes de Paris»と題する贖有状を印刷した可能性もある（Herzog Anton Ulrich-Museum XV.Einbl. WB 3.27）。

16) 例えば、後述する8の*Pierre de Provence et la belle Maguelonne* (BnF, Res-Y^2-1083)や26のM. d'Auvergne: *Devotes louanges a la Vierge Marie* (BnF, Res-Ye-1348).

17) 例えばVillonや*Maistre Pierre Pathelin*についてのKoopmansとVerhuyck（*Le Recueil des repues franches*, éd. J. Koopmans et P. Verhuyck, Droz, 1995, p.35）、*Le chevalier de La Tour*についてのMontaiglon（*Le livre du chevalier de La Tour Landry*, par A. de Montaiglon, Paris, 1854 (Kraus Reprint, 1972), p. lvj）の批判。

18) D. Coq, «Les incunables : textes anciens, textes nouveaux», in *Histoire de l'édition française*, p.190.

19) 正面から向き合っているのはほぼS. (Ohlund-)Rambaudひとりと言ってよい。S. Ohlund-Rambaud, «L'atelier de Jean Trepperel, imprimeur-libraire parisien (1492-1511)», *in Patrons, authors and workshops, books and book production in Paris around 1400*, ed. G. Croenen and P. Ainsworth, Peeters, 2006, pp.123-141; S. Rambaud, «La «Galaxie Trepperel» à Paris (1492-1530)», in *Bulletin du bibliophile*, 2007 (juin), pp.145-150.

20) S. (Ohlund-)Rambaudによる研究の他でTrepperel家について参照した文献は以下のとおり。A. Claudin, *Histoire de l'imprimerie en France au XVe et XVIe siècle*, 4 vols., Paris, 1900-1914, t. 2, pp.151-162; Ph. Renouard, *Documents sur les imprimeurs, libraires...*, Paris, 1901 (Slatkine Reprints, 1969), pp.267-268; Ph. Renouard, *Répertoire des imprimeurs parisiens, libraries...*, éd. J. Veyrin-Forrer et B. Moreau, M.J. Minard, 1965, pp.413-414; R.H. Rouse & M.A. Rouse, *Manuscripts and their Makers, Commercial Book Producers in Medieval Paris 1200-1500*, 2 vols, Harvey Miller, 2000, t.1, pp.325-327; t.2, p.45, pp.87-88, p.93. また、Trepperel家の版本については、G. A. Runnalls, *Les Mystères français imprimés*, Honoré Champion, 1999; *Inventaire chronologique des éditions parisiennes du XVIe siècle...*, par B. Moreau, M. Breazu, G. Guilleminot-Chrétien, 5 vols (1501-1540), Service des travaux historiques de la Ville de Paris, 1972-2004; E. Picot, *Catalogue des livres composant la bibliothèque de feu M. Le Baron James de Rothschild*, 5 vol., Damascène Morand, 1884-1920; M. Pellechet (et M.L. Polain), *Catalogue général des incunables des bibliothèques publiques de France*, 26 vols, Kraus-Thomson, 1970 (1-3, A. Picard, 1897-1909); *Gesamtkatalog der Wiegendrucke*, A. Hiersemann, 1968-; FB (*French Vernacular Books*) などとともに、BnF、British LibraryのISTC、GW Manuskriptなどの OPACを利用した。

21) R. et M. Rouse, *op. cit.*, p.326.

22) H.-J. Martin & J.-M. Dureau, «Années de transition 1500 -1530», in *Histoire de l'édition française*, p.220.

23) 印刷工や書籍商に嫁いだ女性達の団結とその家業の財産維持の努力については、A. Parent-Charon, «A propos des femmes et des métiers du livre dans le Paris de la Renaissance», in *Des femmes et des livres: France et Espagne, XIVe-XVIIe siècle*, Ecole des chartes, 1995, pp.137-148.

24) A. Franklin, *Paris et les parisiens au seizième siècle*, Emile-Paul Frères, 1921, pp.20-21.

25) Ph. Renouard, *Documents*, p.29.

26) 娘婿 J. Jehannot の遺贈カタログ Inventaire（1522年）には、少なくとも1255リーブルの重さの活字や膨大な量の紙葉や羊皮紙などが記録されている（R. Doucet, *Les bibliothèques parisiennes au XVIe siècle*, A. ET J. Picard ET Cie, 1956, p.15)。

27) S. Ohlund-Rambaud, *op.cit.*, pp.131-132.

28) Plan de Paris sous le règne de Henri II par O. Truschet et G. Hoyau (Ph. Renouard, *Répertoire*, annexe).

29) 販売先は一時期 «au Palays en la gallerie comme on va en la Chancellerie» にもあった。G. Coquillart, *les droitz nouveaulx avec le débat des dames et des armes*（出版年不詳、BnF, Res-Ye-233）の1点のみこの販売アドレスがコロフォンに記載されている。

30) Ph. Renouard, *Répertoire*, p.218. 確認できるのは1498年に Nicolas Leconte のために印刷した *Horae: ad usum Sarum (Heures de Salisbury)*(Trinity CL C.20.1[2]) ぐらいであろうか。

31) 今回の調査ではコロフォンに「ジャン・トレペレルによって」«imprime par Jehan Trepperel» ではなく、「ジャン・トレペレルのために」«imprime (...) pour Jehan Trepperel» と印刷された以下の4点の版本があることが分かった。何れもアドレスは Jean Trepperel の «rue neufue Nostre Dame a lenseigne de lescu de France» と同じで、そのうちの2点には J. Trepperel とは異なる P・マーク（Brunet, IV, 1231）が押されている。

La tres plaisante hystoire de Maugist Daigremont, pour Jehan Trepperel, 1527年9月10日刊, マークなし (表の47: BnF, Res- Y^{2}-616)

La Vengeance de Notre-Seigneur, pour iehan treperel libraire et imprimeur, 1531 年6 月17 日 刊, マークなし (表の48: Brunet V-1121)

La conqueste du tres puissant empire de Trebisonde, pour Jehan Trepperel, sans date, 異なる P・マークあり (BnF, Res- Y^{2} 578)

L'art de faulconnerie, pour Jehan Trepperel Libraire et marchant, sans date, 異なる P・マークあり (Chantilly III-F-111))

出版時期、P・マーク、コロフォンの記述から、これら4点の «Jean Trepperel» は J. Trepperel とは考えにくい。Renourad はこの人物を息子 Jean (II) か Vieille-Draperie 街に住んでいた絹卸商人 Jean Trepperel、あるいはその両方である可能性を示唆している (Ph. Renouard, *Répertoire*, p.414)。

32) S. Ohlund-Rambaud, *op. cit.*, p.123.

33) M. M. Smith, *The Title-page, its early development 1460-1510*, The British Library & Oak Knoll Press, 2000.

34) しばしばタイトルページがないと言われる中世写本については、Derolez は12世紀以前にタイトルページに匹敵するページが存在していたがゴチック美学とともに姿を消したと説明している（A. Derolez, «La page de titre dans les manuscrits», in *La page de titre à la Renaissance*, par J.-F. Gilmont et A. Vanautgaerden, Brepols, 2008, pp.17-36）。また M.M. Smith も15世紀のタイトルページを持つ写本を紹介しながら incunabula のタイトルページへの影響は美学的なものに限られたとしている（M. M. Smith, *op.cit.*, pp.31-34）。

35) 年号は新暦に統一し、書名のアンダーラインは他の印刷書籍商との共同作業であることを示す。44と45は J. Trepperel 未亡人と J. Jehannot、46は未亡人のみ、47と48は息子 Jean Trepperel (II) かもしれない人物による印行である。「A」は P・マークがタイトルページとコロフォン前後の両方にあり、「無」はトレペレル家の P・マークの無いもの、「不」はタイトルページが欠落あるいは調査できなかったものである。J. Trepperel は比較的多くタイトルページを入れた印刷本を残しており、1486-1500年のタイトルページを持つパリの incunabula1500点を調査した Hirsch によると第3位にランクされる。因みに第1位は圧倒的な差で Jean Petit である（R. Hirsch, «Title Pages in French incunables, 1486-1500», in *Gutengerg Jahrbuch*, 1978, p.64）。

36) 今回の調査では、印行年の入っていないがアドレスからおおよその出版時期が推測できる版本もほぼこれと同じ流れを示した。

37) M. M. Smith, *op. cit.*, p.80.

38) *Ibid.*, p.92.

39) *Pierre de Provence et la belle Maguelonne* のタイトルページの裏には男女のカップルの姿が描かれた木版画も印刷されており、それぞれ «Maguelonne» と «Pierre» の名の入った吹き出しが出ている。J. Trepperel はこの木版画を同書で五回使用しているが、これは A. Chartier, *Les demandes d'amour*（BnF, Res.-Ye-266、1504年頃）のタイトルページにも使われている。こちらではタイトルページのみで使用され、吹き出しの名前も消されて急ぎ仕事のような印象を受ける。なお、木版画の繰り返し使用については、S. Ohlund-Rambaud が二重枠に入った木版画について比較分析している（S. Ohlund-Rambaud, *op.cit.*, pp.124-134）。

40) この彩色が同時代によるものか後世によるものかはっきりしない。この版本の次ページ左上にも小さな木版画があり、これもピンク色の彩色が施されている。J. Trepperel は『聖バブル伝』をノートル・ダム橋のアドレスで二度（10と29）、ヌゥーヴ・ノートル・ダム通りで一度（BnF, Arsenal, Res-4-H-6460(5)、出版年不詳）出版している。この Arsenal 版では P・マークがタイトルページに印刷され、タイトルの冒頭は飾り文字になっている。

41) C. Bénévent は Erasmus『書簡集』の分析の中で、タイトルページの機能の分析については当時の販売実際を考慮しなければ時代錯誤に陥る危険性があると警鐘を鳴らしている（C. Bénévent, «Les pages de titre des recueils de lettres d'Erasme», in *La page de titre à la Renaissance*, p.40）。

42) 本論ではトレペレル家の印刷本をもっぱら垂直方向で分析したが、他の出版書籍商との水平方向の分析や、「著者」と「作品」を軸とした垂直・水平方向の分析を行うことでインキュナブラからポスト・インキュナブラへの変化をより正確に辿ることができるが、これは他の機会に譲らねばならない。

La famille Trepperel, libraire-marchant-imprimeur parisien et leurs pages de titre — De l'incunable au post-incunable —

HIRATE Tomohiko

A l'époque de transition de l'incunable au post-incunable (1470~1530), la famille parisienne Trepperel (Jean Trepperel, sa femme Marguerite, celle-ci et leur gendre J. Jehannot, et leur fils Jean II) a imprimé divers genres de livres: calendriers, traités de piété, récits d'événements politiques et ordonnances, romans de chevalerie, mystères, facéties etc. Tous sont en gothique, la plus part en français, et presque toujours avec une ou des xylographies. C'est la raison pour laquelle on qualifie les éditions sorties de l'atelier Trepperel de «populaires». On compte plus de 415 éditions; nous avons examiné les pages de titre des 48 éditions datées (*La Destruction de Jherusalem et la mort de Pilate en* 1492~ *La Vengeance de Notre-Seigneur en* 1531).

On peut distinguer trois étapes dans la conception de ces pages de titre. Au cours de la première étape, la page comporte un court modeste titre suivi de la marque d'imprimeur au-dessous (1492~1501, 24 éditions). Ce type de page de titre comporte une identification ou un simple indice d'imprimeur qui sert aux imprimeurs eux-même pour la distinction. Lui succède dans une deuxième étape un titre avec une xylographie correspondant au texte (1499~1506, 7 éditions). Dans cette phase, la page de titre joue non seulement un rôle d'identification, mais elle peut aussi attirer des acheteurs dans la ville. Dans la dernière phase (1511~1527, 4 éditions), la page de titre comporte une xylographie riche avec des informations complémentaires sur le contenu, le lieu d'impression, le nom d'imprimeur etc. C'est au cours de cette étape que l'imprimé est devenu une marchandise plus complète. La page est alors d'autant plus riche en éléments d'écriture que cela facilite la tâche des vendeurs qui la lisent à haute voix conformément à la tradition de lecture orale pratiquée à cette époque.